

Masanori Muraoka 村岡 昌憲

釣り、家族、経営
すべてに全力投球することは
とても難しい。
でもそれに敢えて挑戦すれば、
何倍も充実した人生が
手に入るはず。



僕は二オイに関する事を取り扱う日本のトップブランドである、カルモアという会社の経営者である。この会社には二オイセンサーの事業や産業用消臭剤の事業いくつかの釣具工場は弊社商品のユーザーだとしてマシソンなどの室内空間用の脱臭装置や脱臭フィルターといったものも販売している。その技術を用いて病院向けのホルムアルデヒド除去対策事業も行っているし、なぜかアニメ業界向けに消臭妖精ノールというキャラクタービジネスも展開している。ノールはイラストレーターが初音ミクを描いたことで有名なKEIさん、声優は天使の声で有名な竹達彩奈さんを起用し、アニメ業界で話題沸騰中だ。そして、このカルモアという会社はfirmoというソルトルアーフィッシングを楽しむ人たちが集まる巨大サイトも運営している。さらに昨年にはBIBO(BLUE)という釣具製造会社を立ち上げた。改めて数えると、僕は7つの事業をまとめる立場にある。という、経営者としてさぞ忙しく、世界を飛び回っていると思われるだろうが、実際は決してそうではない。いや、日々あちこち飛び回っているのは事実であるが、それは経営者としてではなく、釣りに人として飛び回っているだけである。(それも仕事ののだが)

その全てを完璧にやりとげられるのか。その答えは決まっている。絶対にNOだ。僕は決して優秀な頭脳を持った人間でもないし、凄まじい人望を持った人間でもない。本当に普通の人間である。が、村岡昌憲という名前を姓名判断の間でみると、ひとつ特徴があって、とんでもない強運であるというところらしい。過去を振り返ってみれば、特に人との出会いという点でその強運が使われており、一緒に働く人に恵まれていて、それでなんと今今までやつてこれたというのが本場の話だ。(釣果にも強運が使われているとの声もあるが、そこは目に涙を溜めてでも釣りの腕であると言いたい)

19歳に社会人になってから、いつも何かひとつの事業とプロアングラーという仕事を両立させるべく、僕なりに必死に二所懸命にやってきた。ひとつづつを立ち上げては一緒にそれを育ててきた幹部に渡し、30代以降は父親の起こした事業も親

孝行と思つて継承し、気付けば7つの事業になったという感じだ。

そして、今の僕が日常的に関わるのはfirmoとBIBOの2事業。それにプロアングラーとしての自分だ。2つではなく、3つ。その他は優秀な幹部社員がやってくれている。しかし、3つでも成り立たせるのは困難極まりないというのが正直な感想だ。2012年、生まれて初めてビジネスマンとしての自分の限界を感じた二年間でもあった。どんなに頑張っても自分一人にできることは限りがあるのだ。当たり前のことなんだけど、それでも40歳になるまでは自分一人でもいざとなったら結構やっちゃうよってことを思っていた。しかし、体力の衰え、家庭への関わり方に対する考え方の変化などがあった、実際はそれは無理だということを感じ知ったのだ。

そこで初めて感じたことは、周りのスタッフへの深い感謝である。いてくれるだけで有り難い。これは人生初めての感覚だった。

僕は理想主義なところがあって、特に誰かを社員として預かる立場になった以上、彼、彼女には必ず幸せになつてもらいたい。だからこうあるべきだ、こうなつて欲しい、こう育つて欲しい、という想いが先走るのである。時間、考え方、お金、知識といった様々なところに厳しさを求めてしまう。そうでなければ後に人生を後悔することになる。今の日本を取り巻く状況は相当にきついな、この先を考えるとつとまらなう。だからこそ、自分のところにいる人間に自分の人生を後悔して欲しくない。それはどんな経営者だって思うことだと思ふのだ。あんな無茶苦茶だった僕でも二所懸命にやったらこれくらいにはなれたのだ。だから君にだってできるはずだ、と。そう思つて期待が先行しすぎるくらいがあるらしい。

が、2012年、あまりの忙しさにそれすらできなかつた。あれもこれもやらなければいけないことだらけなのに、進まない。叱咤激励している場合ではない。課題山積の中で、やろう、進もう、前に行こうとやっているうちにひとつ気付いたことは、やつてくれるだけありがたい。会社に来てくれるだけでありがたいということだった。



それからもうひとつ、僕は家庭にもきちんと向き合っている。いや、それは言いすぎかな。ちょっとだけ寂しい思いをさせているかもしれないが、決して暖かさや笑顔は失われていないと思つている。釣りと家庭の両立の秘訣はただひとつ、サボらないことだ。20代の頃の僕は、男というものは仕事で頑張るものという幻想に取り憑かれ、家庭には目もくれずにひたすら働き、一度は家庭を壊してしまった。その反省から、もう一度縁あって家庭を得た今、家庭ではサボらないということに銘じている。何をサボらないかという家事もそうなんだけど、「一番は」ありがと、「二つは」言葉だど心得ている。ひとつひとつにありがと。毎日にあるがどう。今も自分のそばにいてくれることにありがと。そして、「一番伝えなくちゃいけないこと」もありがと。...そりや照れくさいけど、でもサボらない。些細なことかもしれないけど、感謝の言葉を口に出す積み重ねが、家族にとつても大切なことだと思うから。



それから、僕は友人にも恵まれている。釣り仲間もそうだし、釣りをしない仲間もそう。釣りが好きで、虫が好きで、スケベだ。小学校の頃に出会ったなら、確実に仲良しになつただろうなというところを、容易に想像させるメンバーが大抵だ。というより、今時の小学生より小学生らしい人が多い。彼らは多くの安らぎと笑顔をもたらしてくれる。そして時には多くの気付きを与えてくれる。僕の足りないもの、僕の余計なもの、様々な形で彼らは僕にそれを教えてくれる。本当に有り難い。僕も彼らに何かを伝えていけたら嬉しい。

...ああ、話が随分と逸れてしまった。ちょっと強引だけど、まとめれば、両立というのは本人の努力無くしてできないことには間違いないが、一方で周りの人の応援も無くしてはできないのである。両立できない人生より何かを両立した人生の方が二倍は楽しい。だから周囲への感謝を忘れず、何事も欲張りに頑張つていこうと思つた。